

英語学習媒体の親近度測定を試み

〈英語スピーチ・タイトル, 週刊英雑誌ニューズウィークの記事を題材として〉

An Attempt on Finding out the Extent of Closeness
of the Media between English and A Learner

- Using Speech Titles and the Articles of NEWSWEEK™ as the Materials -

早 田 武四郎 (英語教室)

Takeshirō Sōda (Department of English)

抄録

英語と学習者間に存在する, さまざまな媒体 (メディア) にはそれぞれイメージがあり, それらは親近性と同義と考えられる。そのイメージ (親近性) の度合い (指数) を測定し, 意図的に活用すれば, 授業の名手が行う優れた授業に誰もが比較的容易に近づける手がかりが掴めるのではないかと考えたのが本研究を始めるきっかけであった。現在, 可視の媒体についてはauthenticity > authentic〔 (信頼性) がある, (真正(性)) の〕なる尺度で表されている。しかし, 不可視の媒体の尺度については, 内外の文献で殆ど見かけられない。

本研究は英語と学習者間に存在する媒体 (メディア) (以降, 英語学習媒体と称す) のイメージ (親近性) = 必要性 + 好感性なる仮説⁽¹⁾を検証し, さらには可視, 不可視の媒体が存在するかどうか, についても明らかにすること, 併せて, 週刊英文雑誌Newsweekの読みたい記事を選ぶ際, および, 英語スピーチを行うに当たって, タイトルを選ぶ際, 親近性 = 必要性 (10点満点) + 好感性 (10点満点) なる親近度測定式 (仮称) (成人50名以上に回答してもらい, どちらか平均点の高い方を指数とする) が使えるかどうかを, 116名の被験者によるアンケート回答によって検討する。

I. 問題の背景

教科と学習者間には, さまざまな媒体 (media) が存在する。それらには, 可視のものと不可視のもの, さらには, 親近性 (closeness) の高いものと低いものがある。これは, 自分の心がその対象とどれくらい離れているか, 言い換えれば, その対象と自分の, 心の中の距離である。授業や講義に際しては, 可視, 不可視の, 親近性の高い媒体を可能な限り使うべきである。また, 親近性の低い媒体 (例えば, 当該教科のイメージ) を高くすることは可能であろうと思われる。英語の場合を例にとると, 授業に際して, 学習者にとって親近性の高い媒体を学習者と教科の間に置く, すなわち, 親近性の高い媒体を付加すればよいと思われる。例えば, 明るく, 楽しい (親近性の高い) 英語の歌を授業で使ったり,

興味を持つ、学ぶ必要性の強い（親近性の高い）テーマを用いたグループ・ワークを授業に導入すること等が考えられる。一方、信頼性or真正性（authenticity）という捉え方がある。これは、可視のものに対して、使われているように思われる。例えば、授業における実物やシチュエーション（situation;場面）、実験データ等に対してである。これらは捉える場面にもよるが、親近性が高い、という形容は当たらない。なぜなら、それらは親近性が高いという理由で使われているというよりは、信頼できる、あるいは現実の場面に近い、という理由で使われているからである。他方、親近性＝必要性＋好感性という仮説がある。これは授業場面では、主に不可視のものに使われているように思われる。例を挙げると、雑誌の記事のイメージ、グループ・ワーク、英語スピーチのテーマ等のイメージであろう。他方、実物等は親近性が高いというより、授業場面では、信頼性が高い或いは本物のという方が、より適切と言えよう。また、親近性はイメージと同義とも捉えられる。親近性(closeness)と信頼性(authenticity)は使う次元を異にする尺度と考えられる。

本稿では、先ず、上記、親近性（イメージ）＝必要性＋好感性なる仮説を一、2番目に、英語と学習者間には、可視の媒体と不可視の媒体がある、とする仮説を、アンケートによって検証することを目指している。3番目に週刊英文雑誌Newsweekの記事の中で読みたい記事を選ぶに当たって、親近性（イメージ）＝必要性＋好感性なる仮説を適用できるかどうかの可能性を一、最後に、用意された英語スピーチ・タイトルから最も試みたいタイトルを選ぶ際、上記、親近性（イメージ）＝必要性＋好感性なる仮説を適用できるかどうかの可能性を実際の使用例によって検証することを目指している。

II. 研究の目的.

- (1) 英語と学習者間には、さまざまな媒体があり、それぞれ親近性（イメージ）を有し、必要性＋好感性で構成されている、とする説に客観性があるかどうかを116名の被験者（大学1・2・3年生）に問うことによって明らかにすることである。
- (2) 英語と学習者間には、さまざまな可視または不可視の媒体がある、とする説に客観性があるかどうかを48名の被験者（大学1・2年生）に問うことによって明らかにすることである。
- (3) 週刊英文雑誌Newsweek100冊から、100人の被験者（大学1・2年生）に最も読みたい記事を1人、5つ選ばせ、それぞれ親近度を10点満点で付けさせることによって、新聞・雑誌等の記事の親近度を測定できるかどうかを明らかにすることである。
- (4) 予めリスト・アップした72のスピーチ・タイトルから127名の被験者に読みたい記事を1人当たり10選ばせ、上記、親近度測定法（仮説に基づく式）で親近度を答えさせることによって、スピーチ・タイトルの親近度を測定し、さらに英語と学習者間媒体の親近度測定にその手法が活用できるかどうかを明らかにすることである。

III-1. 仮説

1. 英語と学習者間には、さまざまな媒体があり、それぞれ親近性（イメージ）を有し、好感性＋必要性で構成されている、とする説には客観性がある。

2. 英語と学習者間には、さまざまな可視または不可視の媒体がある、とする説には客観性がある。
3. 週刊英文雑誌Newsweekには、読みたい記事と読みたくない記事があり、それらを区別するとき、英語と学習者間媒体の親近度測定式〔親近性＝必要性（10点満点）＋好感性（10点満点）〕は活用できる。
4. スピーチ・タイトルには、スピーチに際して特に制約がない場合、読みたい度合いの高いタイトルと読みたい度合いの低いタイトルがあり、それらを区別するとき、英語と学習者間媒体の親近度測定式（Ⅲ－1.3の場合と同じ）は活用できる。

Ⅳ. 調 査

被験者	E 大学	1年生	46名
		2年生	36名
		3年生	29名
		4年生	5名
		計	116名

調査年月日 平成7年6月13日(火), 14日(水)各授業時

1. イメージ（親近性）＝必要性＋好感性とする仮説があります。その説を支持できるかどうか、教えてください。

イ. 支持できる	94名	(81.0%)
ロ. 支持できない	13名	(11.2%)
ハ. どちらとも言えない	8名	(6.8%)
ニ. 分からない	1名	(0.8%)
計	116名	
2. 「英語」のイメージ（親近性）を必要性、好感性に分けて、10点評点で示して下さい。

(1) 必要性	(7.5/10) ⁽²⁾	(2) 好感性	(5/10)
1 (0名)	6 (6名)	1 (1名)	6 (0名)
2 (1名)	7 (9名)	2 (0名)	7 (2名)
3 (0名)	8 (13名)	3 (0名)	8 (0名)
4 (0名)	9 (7名)	4 (0名)	9 (0名)
5 (1名)	10 (7名)	5 (1名)	10 (0名)
3. この雑誌(Newsweek)の中で、読みたい記事を5つ挙げ、その親近度を、それぞれ必要性和好感性に分けて親近度の高い順に、添付の評価表に10点満点で表し、次の授業（1週間後）までに提出してください。
 1. 雑誌通し番号
 2. 発行年月日
 3. 読みたい記事名①～⑤（結果は注⁽³⁾参照）
4. 別紙（注に掲載）の英語スピーチ・タイトルの例から、あなたが英語のスピーチをするとき、最も選びたいタイトルを10挙げ、それぞれ、親近度を、必要性和好感性に分け、

10点満点で書きなさい。(結果は注(4)⁽⁴⁾参照)

V. 結果

1. 第1の仮説「英語と学習者間には、さまざまな媒体があり、それぞれ親近性（イメージ）を有し、好感性＋必要性で構成されている、とする説には客観性がある。」は、116名中、94名（81％）の支持があったことにより、支持されたと考えられる。
2. 第2の仮説「英語と学習者間には、さまざまな可視または不可視の媒体がある、とする説には客観性がある。」は「英語」という不可視の媒体について、被験者は何の疑問も差し挟まずに、親近度を付けたことは、不可視の媒体の存在を肯定したと、解することができると思われる。
3. 第3の仮説「週刊英文雑誌Newsweekには、読みたい記事と読みたくない記事があり、それらを区別するとき、英語と学習者間媒体の親近度測定式〔親近性＝必要性（10点満点）＋好感性（10点満点）〕は活用できる。」は、被験者131名が、何の疑問も挟まず、記事名、5つとそれら記事の内容、選んだ理由、親近度（必要性＋好感性）を書いたことは、この仮説が支持されたものと解される。
4. 第4の仮説「スピーチ・タイトルには、スピーチに際して、特に制約がない場合、試みたい度合いの高いタイトルと試みたい度合いの低いタイトルがあり、それらを区別するとき、英語と学習者間媒体の親近度測定式〔親近度＝必要性（10点満点）＋好感性（10点満点）〕は活用できる。」は127名の被験者が何の疑問も挟まずにスピーチ・タイトル10選び、理由、親近性（必要性＋好感性）について書いたことは、この仮説が支持されたことを示すものと解される。

V. 考察

上記、4つの仮説が検証された後、次に、どのような活用の可能性があるだろうか。筆者は英語を通して、考察してきたが、親近性の高い媒体として、使える媒体（練習や実験、課題等）の多い教科は、いわゆる、技能教科や演習・実験科目であろうと思われる。

一方、講義科目においては、使える親近性の高い媒体は無いのかと言えば、そうではない。

どんな教科でも言えることだが、教師の人柄、学識、力量が最も教科の親近性（イメージ）に影響を与える媒体であろう。

次に前項に含まれるが、教師の声、話術、教養、教授法、外見、教材等であろう。親近性の高い媒体を配置できる場面は、講義の中の題材を選択する時であろう。どのような項目で講義を構成するか、その際、学生の興味を惹き、必要性の高い（親近性＝必要性と好感性の高い）項目は何か、それらをどれくらい設定できるかがポイントであろう。しかし、教科書（テキスト）を基に授業を行っている場合、学習者の気に入るようなことばかりはできない。その際は自らが立てたシラバス（授業計画）に最も適合した、すなわち、教えないければならない重要事項（ポイント）を分かりやすく、適切に配列したテキストを選ぶべきであろう。このようなことも、教科書を中心に講義している場合、親近性（必要性＋好感性）の高い媒体を採用することに含まれると考えられる。

三番目には講義室の設備・環境が挙げられる。四番目に評価法である。これは講義開始に当たって説明しておく場合が多いであろう。五番目に講義運営に関する技術上の問題がある。私語をしたくならないような席の配置にしたり、視覚提示が出来る教材をできるだけ用意することであろう。この際、不可視の媒体も可視の媒体と同様、考慮すべきである。六番目に、数名の班を編成して、親近性（必要性＋好感性）の高い課題を与え、協同で完成させることもできる。7番目に、上記の手だてを総合して、学習者の当該教科のイメージをよくし、学習意欲を高め、学力増進に導くことであろう。

では、学習者の当該教科へのイメージを良くするという事は、どのようなことであろうか。イメージだけ良くしても基礎学力や自主学習力が備わっていなければ一時的なものになるであろう。したがって、基礎学力の養成や自主的学習力をつけることが重要である。

基礎学力は古来、読み書き算盤と言われたように国語、算数（数学）と、近代に至っては、それに英語が加わるであろう。さらに、純然たる基礎学力ではないが、健康と体力を維持する生活技術の体得も広い意味で基礎学力に含まれるかもしれない。自主的学習力をつけるには、学習者に学習に対する自信を植え付けることが必要である。言葉を代えれば、学習転移性あるいは学力増進性の高い学習法を採用することであろう。英語の場合を例にとると、英語散文暗唱や朗読、NHKラジオ英会話の聴取等を課題として与えること等が筆者の実験でその効果が示唆されている。英語等、技能・演習・実験科目では練習したり、課題を与えたり、質問をする機会が多い。それらはすべて親近性（好感性＋必要性）の高い媒体を選ぶことができる場面であろう。そのほか、上記、講義科目に関する記述が、そのまま、当てはまると思われる。

VI. 今後の課題 - 結びに代えて -

これまでも、欧米の文献を読んでいて、時折、授業や教材に親近性（必要性＋好感性）の高い媒体採用を勧める主張を見ることがあった。また、親近性の高い題材を配したテキストや教材を見て目を見張ることも何度かあった。そのようなことは筆者がイギリスに留学した際も、強く印象に残っている。それは教師の指導技術や使用する教材であった。

これら英語と学習者間に存在する媒体を特定し、その親近度を測定することは、4年前から考えはじめたことである。その目指すところは、媒体の親近度を（例えば）10点満点で数量化して活用し、できるだけ親近度の高い媒体を使用することに資することによって、授業の名手が行う優れた授業を誰でも容易に実践できる道に繋げることである。

このテーマに関連して、これから、さらに検証したい仮説は本稿の第2の仮説「英語と学習者間には、さまざまな可視または不可視の媒体がある」を明確な形でもう1度検証することと、検証したい今1つの仮説は「英語と学習者間の媒体はそれぞれ必要性と好感性で構成され、親近度を高める手だてを講じても、この位置は逆転しない。そして、高い方がその媒体の親近度指数である」というもので、今後の更なる研究の課題としたい。

注

- (1) Krashen, S.D., and Terrelの提唱するNatural Approachでは教材は、「学習者が必要としている、または興味を持っている内容をインプット用の教材として扱う、」とある。
- (2) 「英語のイメージ」として、アンケート結果は、必要性7.5/10 (44名), 好感性5/10 (4名) を示しているのので、7.5が「英語のイメージ」の親近度指数と捉えて良いと考えられる。この場合、好感性が5/10となったが、この場合、回答者が4人と少ない。指数が低いので、これがこの媒体の親近度指数とはならない。回答者が少なく、親近度が高くなることがあったらどうなるか。このような事態は起こり難いと考えられる。[必要性か好感性のどちらか、該当すると思われる方だけ、親近度指数を書くことになっているので、大部分の者は、常識的な、いわば人間の最大公約数的な判断をし、記入すること(必要性か好感性)は必然的にどちらかに偏る可能性が極めて高くなるからである。]しかし、万一、そのような事態が起こった場合は10人以上、被験者がいることが条件であろう。

(3) 資料①

資料① Newsweek の記事親近度調査

記事番号	雑誌番号	発行年月日	記事名	記事の内容	選んだ理由	親近度	
						必要性	好感性
65	18	91 1	Asia Japan: Watching for the 'Big One'	地震の予測は時間の無駄遣いか?	日本がどのように紹介されているか知りたかった	8	8
1	92	93 4	Sex in the snoring 90s	現在の性に関する調査 アメリカの最新意識調査	読みたい気になった	5	8
2	103	93 4	Ethnic Clensing	カンボジアのクメール族のベトナム人に対する姿勢	世界の平和でない地域の確認	7	4
3	23	93 6	Museveni, Babangida: Keeping hope Alive	アフリカの飢饉について	貧乏な日本を見直すため	10	10
4	66	93 7	Paying The Cost of 'Sharia'	スーダンの内政と生活の現状について	写真の印象が強烈だった。	10	9
5	54	93 8	A Peace More Costly Than War	ボスニア紛争の代償は大きい	タイトルが目をついた事の重大性	10	10
6	21	93 9	Gibson Ventures Beyond Skin Deeo	映画の紹介	メル・ギブソンの映画に関心があったから	5	9
7	19	93 9	Till Death Do Them Part	エイズに冒された人について	今、エイズについて大きな問題になっているから	9	7
8	26	93 10	Art in Epock of high Hedonism	芸術・絵に関する記事	絵がカラフルで綺麗だったので	9	10
9	115	93 10	Up Up and Away	バスケット・ボールの有名選手マイケル・ジョーダン	この種の記事に興味があったから	8	10
10	25	93 10	The Bad Boy Is Back	独自の意見をもつパパンドレウが政権に復帰した	ギリシャという国に興味があった	9	0

※ 1人にNewsweek 1冊を与え、読みたい記事を5つ選ばせ、第1位のみ集計の対象とした。紙面の都合により10人分のデータを掲載

(4) 資料②

英語スピーチ・タイトルの親近性			
スピーチ・タイトル候補	申告人数	親近度	
		必要性	好感性
1) My Dream(s)	43	7.67	(7.69)
2) My Hometown	41	6.11	(7.23)
3) My Club	34	7.70	(8.14)
4) My Hobby	32	6.34	(7.88)
5) Self-introduction	30	(7.54)	7.16
6) My High School Days	30	6.34	(7.75)
7) My Travel	29	6.77	(8.41)
8) My Favorite Sports	26	7.53	(8.34)
9) My Family	24	7.34	(8.02)
10) My Friends	23	7.24	(8.14)
11) My Favorite Food	23	6.86	(7.28)
12) My Pet(or My Favorite Animals)	23	5.67	(8.30)
13) My Part-time Job	19	6.22	(7.27)
14) My Favorite Movie	19	4.93	(9.32)
15) A Country where I want to go	15	6.73	(8.67)
16) Wakayama (city or ken)	13	7.04	(7.08)
17) My Favorite Season	13	5.63	(7.38)
18) Happiness	12	7.60	(9.10)
19) Me and English	12	(8.50)	7.07
20) My Character	11	(8.60)	7.45
21) My University	10	6.74	(6.92)
22) An Event in this Summer Vacation	10	6.34	(6.74)

※申告人数10名以上のテーマを掲載

◎ () 内の指数はそのスピーチタイトルの親近度指数(数の多い方をとる)

☆70のスピーチタイトルより、10を選ばせ、上位5つを集計の対象とした。

参考文献

- Krashen, S.D., and T.D. Terrel., *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. Oxford: Pergamon Press., 1993
- 佐野 富士子 「The Natural Approach (ナチュラル・アプローチ)」『田崎清忠編, 現代英語教授法総覧』大修館書店 1995
- 早田 武四郎 「英語学習媒体の親近性尺度作成に関する研究」和歌山大学教育学部『教育実践研究指導センター紀要』No.4 85-93 1994
- 早田 武四郎 「親近性の高い媒体 (メディア) 採用の重要性」松村幹男監修『英語科教育の理論と実践』《理論編》現代教育社 pp.201-203 1996
- 田崎 清忠 (編) 現代英語教授法総覧 大修館書店 1995